

オリンポスの果実

田中英光

新潮文庫



オリンポスの果実^{かじつ}

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草76

昭和二十六年九月三十日 発行
昭和四十二年十一月十日 二十二刷改版
昭和五十一年八月十日 三十五刷

著 者 田^た中^{なか}英^{ひで}光^{みつ}

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

Ⓔ 印刷・東洋印刷株式会社 製本・有限会社加藤新栄社

© Eiichirō Tanaka 1951 Printed in Japan

新 潮 文 庫

オリンポスの果実

田 中 英 光 著



新 潮 社 版

オリンポスの果実

一

秋ちゃん。

と呼ぶのも、もう可笑^{おか}しいようになりました。熊本秋子さん。あなたも、たしか、三十に間近い筈だ。ほくも同じく、二十八歳。すでに女房を貰い、子供も一人できた。あなたは、九州で、女学校の体操教師をしていると、近頃風の便りにききました。

時間というのは、変なものです。十年近い歳月が、当時あれほど、あなたの事というに興奮して、こうした追憶をするのさえ、苦しかったほくを、今では冷静におししずめ、ああした愛情は一体なんであつたらうかと、考えてみるようにさせました。

恋というには、あまりに素朴な愛情、ろくろく話さえしなかった仲でしたから、あなたはもう忘れていくかもしれない。しかし、ほくは今日、ロスアンゼルスで買った記念の財布のなかから、あるとき大洋丸で、あなたに貰った、杏^{あんず}の実を、とりだし、ここ京城の陋^{ろう}屋^{おく}の陽もささぬ裏庭に棄てました。そのとき、急にこうしたものが書きたくなったのです。

これはむろん恋情からではありません。ただ昔の愛情の思い出と、あなたに、お聞きしたかったことが、聞けなかった心残りからです。

思わせぶりではありますがその言葉は、この手記の最後まで、とっておかして下さい。

二

あなたにとってはどうでしょうか、ぼくにとって、あのオリムピアへの旅は、一種青春の醗酏のごときものがありました。あの前後を通じて、ぼくはひどい神経衰弱にかかっていたような気がします。

ぼくだけではなかったかも知れません。たとえば、すでに三十近かった、ぼく達のキャプテン整調の森さんでさえ、出発の二三日前、あるいかがわしい場処へ、デレゲエション・パッジを落してきたのです。

モオラン (Morning-run) と称する、朝の駆足をやって帰ってくると、森さんが、合宿傍の六地蔵の通りで背広を着て、俯いたまま、何かを探していました。

駆けているぼく達——といっても、舵の清さんに、七番の坂本さん、二番の虎さん、それに、ぼくといった真面目な四五人だけでした——をみると、森さんは、真っ先に、ぼくをよんで、「オイ、大坂、いっしょに探してくれ」と頼むのです。ぼくの姓は坂本ですが、七番の坂本さんと間違え易いので、いつも身体の大きいぼくは、侮蔑的な意味も含めて、大坂と呼ばれていました。

そのとき、バッジを悪所に落した事情をきくと、日頃いじめられているだけに、皆が笑うと一緒に、噴き出したくなるのを、我慢できなかったほど、好い気味だ、とおもいましたが、それから、暫くして、ぼくは、森さんより、もっとひどい失敗をやってしまったのです。

出発の前々夜、合宿引上げの酒宴が、おわると、皆は三々五々、芸者買いに出かけてしまい、残ったのは、また、舵の清さん、七番の坂本さん、それと、ぼくだけになってしまいました。ぼくも、遊びに行こうとは思っておりましたが、ともあれ東京に実家があるので、一度は荷物を置きに、帰らねばなりません。

その夜は、いくら飲んでも、酔いが廻らず、空しい興奮と、練習疲れからでしょう、頭はうつろ、瞳はかすみ、臉はおもく時々痙攣していました。なにしろ、それからの享樂を妄想して、夢中で、合宿を引き上げる荷物も、いい加減に縛りおわると、清さんが、「坂本さん、今夜は、家だろうね」とからかうのに、「勿論ですよ」こう照れた返事をしたまま、自動車をよびに、戸外に出ました。

そのとき学生服を着ていて、協会から、作って貰った、揃いの背広は始めて纏う嬉しさもあり、その夜、遊びに出るまで、着ないつもりで手をとおさないまま、蒲団の間に、つつんでおいた、それが悪かったんです。はじめから、着ていればよかった。

運転手と助手から、荷物を運び入れてもらったり、ぼくは、自動車の座席にふんぞりかえり、その夜の後の享樂ばかり思っていました。なにしろ、二十のぼくが、餞別だけで二百円ばかり、

ポケットに入っていたんですから——。

その頃、ぼくは、銀座のシャ・ノアルというカフェのN子という女給から、誘惑されていた。そして、それが、ぼくが好きだというより、ぼくの童貞だという点に、迷信じみた興味をもち、かつ、その色白で、瞳の清^すい彼女が、先輩Kさんの愛人である、とも、きかされていた。その晩、それを思い出すと、腹がたつてたまらず、よし、俺でも、大人並の遊びをするぞと、覚悟をきめていた訳です。が、さすがにこうやって働いている運転手さん達には、すまなく感じ、うちに着いてから、七十錢ぎめのところを一元やりました。

宅に入ると、助手が運んでくれた荷物は、ぐちゃぐちゃに壊^{こわ}れている。が、最初のぼくの荷造りが、いい加減だったのですから、気にもとめず、玄関へ入り、その荷物を置いたうしろから顔をだした、皺^{しわ}と雀斑^{そばかす}だらけの母に、「ほら、背広まで貰ったんだよ」と手を突ッこんで、出してみせようとしたが手触りありません。「おやッ」といぶかしく、運んでくれた助手に訊ねてみよう、表に出てみると、もう自動車は、白い煙^{けむ}りが、かすかなほど遙^{はる}かの角を曲るところでした。「可笑しいなア」とぼやきつつ、ふたたび玄関に入って、気づかう母に、「なんでもない。あるよ、あるよ」といいながら、包みの底の底までひっくり返してみましたが、ブレザーコオトはあっても、背広の影も形ありません。なにしろ明後日、出発のこととて、外出用のユニホームである背広がなくなったらコオチャアや監督に合せる顔もない、金を出して作り直すにも日時がないとおもうと根が小心者のぼくのことである。もう、顔色まで変ったのでしょう。はや、キ

ンキン声で、「お前はだらしがないからねエ」と叱りつける母には、「あア、合宿に忘れてきたんだ。もう一度帰ってくる。大丈夫だよ」といいおき、また通りに出ると車をとめ、合宿まで帰りました。

艇庫には、もう、寝てしまった艇番夫婦をのぞいては、誰一人いなくなっています。二階にあり、念の為、押入れを捜してみましたが、もとより、あろう筈がありません。

もう、先程までの、享樂を想つての興奮はどこへやら、ただ血眼になってしまった、ぼくは、それでも、ひょっとしたら落ちてはいないかなアと、浅ましい恰好で、自動車の路すじを、どこからどこまで、這うようにして探してみました。そのうち、ひょっとしたら、合宿の戸棚のグリス罐の後ろになかったかなアと、溝のなかをみつめている最中、ふとおもいつくと、直ぐまた合宿の二階に駆けあがって、戸棚をあけ、鉄亜鈴や、エキスパンダアをどけてやはり罐の背後にないのをみると、否々、ひょっとしたら、あの道端の草叢のかげかもしれないぞと、また周章で、駆けおりてゆくのでした。

捜せば、捜すだけ、なくなったということだけが、はつきりしてきます、頭のなかは、火が燃えているように熱く、空っぽでした。もう、駄目だと諦めかけているうち、ひょっとしたら、さつき家で、蒲団を全部、拡げてみなかったんじゃないか、という錯覚が、ふいに起りました。そうになると、また一も二もありません。一縷の望みだけをつないで、また車をつかまえると「渋谷、七十銭」と前二回とも乗った値段をつけました。

と、その眼のぎょろとした運転手は「八十銭やって下さいよ」とうそぶきます。場所が場所だけに、学生の遊里帰りとでも、間違えたのでしょう、ひどく反感をもった態度でしたが、こちらは何しろ気が顛倒（てんどう）しています。言い値どおりに乗りました。

ぼくは、車に揺られているうち、どうも、はじめの運転手に盗（と）られたんだ、という気がしてきました。（彼奴（あいつ）に一円もやった。泥棒に追銭とはこのことだ）と思えば口惜しくてならない。あまりかねて、「ねエ、運転手君、……」と背広がなくなったいきさつを全部、この一癖（ひとくせ）ありげな、運転手に話してきかせました。

すると、彼は自信ありげな口調で、「そりゃア、やられたにきまっているよ。こんな商売をしているのには、そんなのが多いからね」とうなずきます。ぼくは、「そうかねエ」と愚にもつかぬ嘆（なげ）声を発したが、心はどうしよう、と口惜しく、張り裂けるばかりでした。が、その運転手は同情どころかい、といった小面憎（こづらにく）さで、黙（もく）りかえっています。

それでいて、家につくと、彼は突然、ここは渋谷とはちがう、恵比寿（えびす）だから、十銭ましてくれ、ときりだしました。てっきり、嘗（な）められたと思いましたが、こちらも口汚（くわ）く罵（のの）しかえす。と、向うは金槌（レバ）をもち、扉（ド）をあけ、飛びだしてきました。「喧嘩（けんか）か。ハ、面白いや」と叫（こ）び、ええ、やるか、と、ぼくも自棄（やけ）だったのですが、もし血をみるに到ればクルウの恥、母校の恥、おまけにオリムピック行は、どうなるんだと、思いかえし、「オイ、それじゃア、交番に行こう」と強く言いました。「行くとも！ さア行こう」たけりたった相手は、ぼくの肩を掴（つか）みま

す。振りきったぼくは、ええ面倒とばかり十銭払ってやりました。「ざまア見ろ」とか棄台詞を
残して車は行きました。ぼくは、前より余計しょんぼりとなって玄関の闕をまたいだのです。

気の強い母は、ぼくの顔をみるなり、噛みつくように、「あったかえ」と訊ねました。ぼくは
無言で、荷物のところへ行くと、蒲団はすでに畳んで、風呂敷が、上に載っています。どうして
いいか分らなくなったぼくは、空の風呂敷をつまんで、振って、捨てる、ただ、母の怒罵をさ
ける為と、万一を心頼みにして、「やっぱり合宿かなア。もう一度、捜してくらア」と留める母
をふりきり、家を出ました。勝気な母も、やっぱり女です、兄が夜業でまだ帰りませんし、「困
ったねエ」を連発していました。

ぼくはまた、自動車で、渋谷から向島まで行きました。熱が出たようにあつい額を押え、憤り
と悔いにギリギリしながら、艇庫につき、念を入れてもう一回、押入れなぞ改めてはみましたが
夜も更け、人気のない二階はたださえ、がらんとして、いよいよ、もう駄目だ、という想いを強
めるだけです。

ぼくは二階の廊下を歩き、屋上の露台のほうへ登って行きました。眼の下には、鋭い舳をした
滑席艇がぎっしり横木につまっています。そのラッカア塗りの船腹が、仄暗い電燈に、丸味を
おび、つやつやしく光っているのも、妙に心ほそい感じで、ベランダに出ました。遙か、浅草の
裝飾燈が赤く輝いています。時折、言問橋を自動車のヘッドライトが明滅して、行き過ぎます。
すでに一艘の船もない隅田川がくろく、膨らんで流れてゆく。チャップチャップ、船台を洗う

波の音がきこえる、ぼくは小説めいた気持ちでしょう、死にたくなりました。死んだ方が楽だと、感じたからです。

大体が、文学少年であつたぼくが、ただ、身体の大きいために選ばれて、ボオト生活、約一箇年、「昨日も、今日も、ただ水の上に、陽が暮れて行つた」と日記に書く、気の弱いぼくが、それも一人だけの、新^{フレッシュマン}人として、逞^{たくま}しい先輩達に伍し、鍛えられていたのですから、ぼくにとっては肉体的の苦痛も、ですが、それよりも、精神的なへばりのほうが我慢できなかった。

ぼくは、ボオトのことばかりでなく、日常生活でも、することが一々無^{ぶざま}態だといふので、先輩達にずいぶん叱られた。叱られた上に馬鹿にされていました。ぼくみたいにな、弱気な人間には、ひとから侮辱されて抵抗の手段がないと諦め切る時ほど、悲しい事はありません。なにをいって、大坂^{ダイジン}は怒らない、と先輩達は感心していましたが、怒ったら、ボオトを止めるよりほかに手段がない。また、そうしてボオトを止めるのは、ぼくのひそかに傲慢^{ごうまん}な瘦意^{やせ}地にとつて、自殺にもひとしかった。

それで、背広を失くした苦痛に、加えて、こうした先輩達の罵声が、どんなに辛辣^{しんりつ}であろうかと、思つただけでもたまりません。蔭口や皮肉をとばす、整調森さんの意地悪さ、面とむかつて「ぶちまわすぞ」と威^{おど}かす五番松山さんの凄^{すま}まじさ、そうした予感が、堪えがたいまでに、ちらつきます。またそうした先輩達の咎^{とが}から、いつも庇^{かば}ってくれるコオチャアやO・B達に対しても、ぼくの過失はなお済まない気がします。

悶え悶え、ぼくは手摺によりかかりました。其処は三階、下はコンクリートの土間です。飛び降りれば、それでお終い。思い切って、ぼくは、頭をまえに突き出しました。ちょうど手摺が腰の辺に、あたります。離れかかった足指には、力が一杯、入っています。「神様！」ぼくは泣いていたかもしれません。しかし、その瞬間、ぼくが唾をすると、それは落ちてから水溜りでもあったのでしょう。ポチャンという、微かな音がしました。すると、ぼくには、不意と、なにか死ぬのが莫迦々々しくなり、殊に、死ぬまでの痛さが身に沁みてもわれ、いそいで、足をバタつかせ、圧迫されていた腸の辺りを、まえに戻しました。いま考えると、可笑しいのですが、そのときは満天の星、銀と輝く、美しい夜空のもとで、ほんとに困って死にたかった。

そんな簡単に、自殺をしようと思えるのには、多分、耽読した小説の悪影響もあったのでしょう。ぼくは冷たい風が髪をなぶるのに、ヤツと気がつきかけたが、もうなんとしても、背広は出てこないという点に、考えがぶつかる、やはり死の容易さに、惹かれてゆきます。ぼくは、なにか、ほかの方法で死にたいと、思いました。身投げは泳げるし、鉄道自殺は汚い、ああ、もう、と目茶苦茶な気持ちに駆りたてられ、合宿横にある交番に、さしかかると、「オイ」と巡査に呼び咎められました。それ迄は、これから、向島の待合に行つて、芸者と遊んだ末、無理心中でもしようかという虫の良い了見も起しかけていたのですが、ハッと冷水をかけられた気が致しました。

こんな夜遅く、学生がへんな恰好でうろついていたからでしょう。巡査は、ぼくの傍にきて、

じっとみつめてから、なんだという顔になり、「ああ君はWの人じゃないか」といい、大学の艇庫ばかり並んでいる処ですから、ボート選手の日頃の行状を知っていて、「いいねエ、君等は、飲みすぎですか」と笑いかけます。ぼくの蒼ざめた顔を、酒の故とでも思ったのでしょうか。照れ臭くなったぼくは、折から来かかった円タクを呼びとめ、また、渋谷へと命じました。

家に着いたぼくは、なにもいわず、ただ「ねかしてくれ」と頼んだのですが、あまり顔色と眼付が変なのに、心配した母は、すぐ、叱りもせず、床をしいてくれました。翌朝、眼の覚めたときは、もう十時過ぎでしたらう。枕もとの障子一面に、赫々と陽がさしています。「ああ、気持よい」と手足をのばした途端、襖ごしに、舵手の清さんと、母の声がします。ぼくの胸は、直ぐ、一杯に塞がりました。

もう寝たふりをして置こうと、夜着をかぶり、聴きたくもない話なので、耳を塞いでいると、そのうち、また眠ってしまったようです。あの頃は、よく眠りました。練習休みの日など、家に帰って、食べるだけ食べると、あとは、丸一日、眠ったものです。それ程、心身共に、疲れ果てていたのでしょう。ところが、やがて、「やア、坊主、ねてるな」という兄の親しい笑い声と、同時に、夜着をひっぱがれました。二十歳にもなっているぼくを、坊主なぞ呼ぶのは、可笑しいのですが、早くから、父を失い、いちばん末っ子であったぼくは、家族中で、いつでも猫ッ可愛がりに愛されていて、身体こそ、六尺、十九貫もありましたが、ベビィ・フェイスの、未だ、ほんとに子供でした。

ぼくの蒲団をまくった兄は、母から事情をきいたとみえ、叱言こごと一ついわず、「馬鹿、それ位のことでもよくよする奴があるかい。さあ、一緒に、洋服を作りに行つてやるから、起きろ、起きろ」とせかしたてるのです。ぼくは途端に、「ほんと」と飛び起きました。兄は会社関係から、日本毛織の販売所に、親しいひとがいて、特に、二日で間に合うように頼んでやる、というので、ぼくは大慌あわてに、支度を始めました。

あとになって、判つたのですが、この朝、老いた母は、六時頃に起きて、合宿まで行つてくれ、また合宿では、清さんがひとり、明方に帰つて来ていて、母から話をきくと、一緒に、家まで様子を見にきてくれたとのことでした。清さんは、ぼくを落着くまで、静かにほつて置いたほうが好いだろう。背広のことは、コオチャアや監督に、よく話をしておきます。災難だから、仕方がない。明朝、出発のときは、ブレザーコートをきて颯爽さっそうと出て来るように言つて下さい。なアに、学生服で、あちらに行つたつて、差支さしつかえないでしょう、と言いついてくれた由。兄は、其頃、すでに、共産党のシンパサイザアだったらしいのですから、ぼくや母の杞憂きゆうは、てんで茶化していたようでしたが、さすがに、一人の弟の晴衣とて心配してくれたとみえます。母といい、兄といい肉親の愛情のまえでは、ひとことの文句も言えません。

服は仮縫いなしに、ユニホムと同色同型のものを、出帆の時刻までに、間に合してくれることになりましたが、やはり出来てきたのは少し違うので、ぼくはこの為、旅行中、背広に関して、いつも顔を赤らめねばなりませんでした。